

伊藤由孝作 ノンフィクション「おやじ」

- 効果音 (救急車のサイレン。ブレーキ停車)
- 伊藤由孝の母 お父さん、しっかりして。すぐ病院だから。しっかりして、お父さん！（エコー）
- 由孝ナレーション 父が入院して、早3か月がたった。でも、これが初めての入院ではない。父は、若いころから酒を飲み、そのためアルコール中毒になってしまった。父の初めての入院は、僕が小学校6年のころだった。それから今度で7回目である。そのためか、今回の入院の時は、「スカ」といった、あきらめめいた冷めた言葉が心の中を走った。
- 由孝(モノローグ) あれほど「やめろ」と言われても、やめないで、結局自分の体をこんなにしてしまった。その度に、おれやおふくろがどんなにつらい思いをしたか。治っては飲み、飲んでは担ぎ込まれ、今度で7回目か。チエ、もう知らないぞ、どうなったって！
- ナレーション 僕の心の中に、父に対しての愛など、もうどこを探してもなくなっていた。しかし、今度の病は違っていた。ある日、僕は母から予期せぬことを聞いた。
- 由孝 話ってなあに？
- 母 ま、お座り。お父さんのことなんだよ。実はお父さん、がんなんだよ。
- 由孝 え、がん…？
- ナレーション 3か月の間、父のところへは全然足を運ばなかった。”今度は少し長いな”とは思っていたが、それほど気にもしていなかった。すでにおやじの存在は、僕にとって遠いものになっていたのだ。
- 由孝(モノローグ) いつもの肝臓じゃないのかよ。おやじががん？(エコー)なんてことだ。これじゃもう助からないな。
- 母 さんざ飲み続けて、とうとうこうなってしまったね。(涙ぐむ)さ、由孝、この下着、お父さんのところに持って行っておくれ。お父さん、大分やせてね。60キロから47キロに。それにいくらか背も低くなったみたい。
- 由孝 行ってくるよ。
- 効果音 (ドアの開閉音)
- ナレーション 父の病室に入った。窓の外は暗く、蛍光灯の光が青白く父をさしていた。父は寝ておらず、天井を見つめていた。
- 由孝 父さん、下着持ってきたよ。
- 父 由孝か。
- 由孝 体の調子、どう？
- 父 このところ、調子いいんだ。
- 由孝 そう。それはよかった。
- ナレーション 父は起き上がり、下着を取り換え始めた。母の言ったとおり、かなりやせている。入院する前は太っていた父だが、今はガリガリだ。太ももの、両手が回るくらいだ。こんな父を見ると、以前の父を思い出さずにはいられなかった。それは、僕が小学生のころだった――。
- 音楽 (ブリッジ 回想)
- 父 酒を出せ、酒を！
- 母 もう酒はありません。

父 由孝に買いに行かせろ。

母 こんなに毎晩じゃ、あの子だって嫌がっています。それに、もうお金だって…。

父 ええい、つべこべ言うな！ 由孝、行ってこい！

ナレーション あのところは、そんな父が怖くてたまらなかった。どんなにイヤだと思っても、とても逆らうことなどできなかった。それが、今はどうだ。今、父とケンカしたら、簡単にねじ伏せることさえできる。が、自分の前に弱々しく座っている父を見ていると、とてもそんな気は起こらなかった。僕は、涙が出そうになった。父はベッドに入り、片手を伸ばしてイスを取ろうとした。

由孝 いいよ、無理しなくて。おれが取るよ。

父 由孝、ゆっくりしていくんだろ。

由孝 ああ。

ナレーション 父は、また天井のほうを黙って見つめていた。

由孝(モノローグ) おやじは何を考えているんだろう？ 自分の病気のことを知っているんだろうか？

ナレーション 僕は自分の部屋に入り、神様に祈った。父のために祈ったのは、本当に久しぶりのことだ。“死にゆく父”のイメージを現実にも目の当たりにした時、僕にできることはそれしかなかった。

由孝 (祈り)愛する天のお父様、僕の父を助けてください。父は酒におぼれ、肝臓を壊し、既に6回入院しました。今回の入院では、がんに冒されているということです。天のお父様、父は僕にとってたった一人の父親です。父を失いたくありません。どうか父にいやしの手を差し伸べてください。どうか父を助けてください。お願いします！

ナレーション 僕は、教会の牧師先生にも話し、みんなにも祈ってもらった。毎週水曜日の祈禱会にも出席して、声を合わせて祈った。

効果音 (バックで2、3人、祈る声)

ナレーション いよいよ父の手術の日が来た。学校から帰宅。すぐ病院に向かった。母と祖母が手術室のわきの長イスに座っていた。2人の顔は、心配を隠せないようだ。

由孝 手術が始まったのは何時？

母 1時から。

由孝 じゃあもう3時間か。

効果音 (時計のカチカチ言う音、次第に高く)

ナレーション 午後5時、やっと手術室のランプが消えた。ドアが開き、父が運ばれてきた。

医師 ああ、奥さん、終わりましたよ。

母 ありがとうございます。そ、それで、主人はいかがでございましょう？

医師 ええ、かなり悪くなっていましたが、まだ望みはあります。腸のほうもやられてましたが、そこらは切り取っておきました。まあこの1、2週間が峠です。

由孝(モノローグ)(エコー)おやじ、助かってくれ！

ナレーション 医師が、切り取った父の腸の一部を僕たち3人に見せてくれた。血に染まったガーゼに包まれたどす黒い肉片。これが、たった今まで父の腸の一部だったとは、まるで信じられなかった。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション 手術後、2週間がたった。医師の手当てのかいあって、無事峠も越し、父の体は回復へと向かっていた。祖母も、母も、僕も、今度はもうダメだと覚悟をしていただけに、この父のいやしは、うれしいというよりは、不思議だった。

1か月ほどたって、父はもうだいぶ良くなっていた。いつものように学校の帰りに寄ると、父はベッドの上に起き上がって、何かの本を読んでいた。

父 ああ、由孝か。まあ掛けろや。

由孝 お父さん、何読んでるの？

父 ああ、これか。聖書だ。

由孝 え？ どうしてお父さんが…？

父 ん？ うん、昨日な、お前が行ってる教会の牧師先生が見えてな、置いてってくれたんだよ。おれみたいなのは、よう分からんかもしれないが、こんなときでもないと思えんとって、こうして読んでるところだ。

由孝 そう。先生来てくれたの。

父 うん。お前が教会行ってることは薄々知っとったが、おれも今度という今度は、いろいろと考えさせられたよ。発作起こして、病院に担ぎ込まれて、痛み止めの注射を打ちながら、連日の検査攻め。手術の日が決まって、一日一日と迫ってくる。夜中に病院のベッドで真っ暗い天井を見ながら、“おれもいよいよ死ぬのかな”って考えた。そしたら、これまでのおれの人生のことが次から次と思い出されてきてなあ。

由孝 ふーん。怖かった、父さん？

父 ああ。だけど、心の隅で、“お前はやりたいことをやり、飲みたいだけ飲んで、こうなったんだ。死んでも仕方ねえだろう”という妙なあきらめの気持ちがあった。“それよりも、あとに残る者はどうなんだ？”って考えたら、お母さんやお前の顔が次々に浮かんでくるんだよ。おれは今まで、お前たちに父親として何をしてきたんだ？ なんにもしやれねえどころか、さんざん面倒をかけてきた。——そう考えたら、“このまんまじゃ死んでも死に切れねえなあ”と心底思ったよ。

ナレーション ぼそぼそとかみ締めるように話す父の声を聞きながら、僕はふと、“ああ、これが神様のみ心だったんじゃないだろうか”と思った。父に、自分の生き方を考えさせるための病だったのではないか。だとしたら、こうして父が九死に一生を得たのは、もう一度新しく生き直すチャンスと、神様が与えてくださったのではないだろうか。

父 手術の麻酔から覚めた時、おれは自分の生きているのが不思議だった。この間、教会の先生が見えて、お前がお祈りの会で涙流してお父さんのために祈っていたと聞いた時、おれはびっくりした。こうして生きているのは、そのお祈りのせいかもしれないよ。それにしても、今までおれのところにほとんど寄り付かなかったお前が、このおれのためになあ。(涙声)

由孝 いいんだ、父さん、そんなこと。

父 由孝、過ぎたことは取り返しがつかんが、父さん、なんとかもう一度やってみるわ。母さんやお前のためにもな。

ナレーション 僕は、おやじとの間に長い間わだかまっていた“氷の壁”のようなものが、少しずつ解けていくような心地がした。神様が父を生かしてくださったのは、父のためだけではなく、僕のためでもあったのだ。

由孝 (祈り)愛する天のお父様、本当にありがとうございます。がんに侵された父にいやしのみ手を差し伸べてくださいました。あなた様のみ手がなければ、父は助からなかったでしょう。本当にありがとうございました。

ナレーション 酒という誘惑に負け、琥珀色の液体におぼれた人間、それが僕の父だ。この父の経験を見

るとき、人間の弱さを知る。

あれから1年がたった。父は時々体の調子の悪いことを訴えながらも、一生懸命に働いている。その姿は、神様は祈りを聞いてくださること、そして、信ずる者に最善をなして下さることの生きたあかしでもある。

<完>